

## ムーンライト・セレナーデ

### シモーネ

- 二人でお茶を(5:51)
- フラジャイル(4:50)
- L-O-V-E(3:39)
- フォー・ノー・ワン(3:43)
- セイブ・ユアラブ・フォーミー(5:04)
- あなたの顔になれてきた(6:01)
- 恋の終わり(4:00)
- 枯葉(4:15)
- 縁は異なもの(4:15)
- ニアネス・オブ・ユー(3:27)
- ベサム・ムーチョ(5:04)
- ライク・サムワン・イン・ラブ(4:08)
- ピース(4:19)
- ムーンライト・セレナーデ(6:03)
- ザヴォイデ・ストンプ(3:26)

<p>シモーネ (vocal) ジョン・ディ・マルティーノ (piano) ハンス・グラヴィシュニック (bass) フィリップ・コップマイヤー (drums)</p>
<p>©© 2004 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.</p>
<p>*</p>
<p>Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan. Recorded at Avatar Studio in New York on July 19 and 20 , 2003. Engineered by David Darlington. Assistant<span> </span>: Ross Petersen Technical Coordinator by Derek Kwan. Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound<span> </span>: Shuji Kitamura and Tetsuo Hara. Photos by John Abbott. Designed by Taz.</p>

魅力を理解してもらうまでにそれほど長い時間は必要としなかった。以下は、ジャズに関わるアメリカの様々なメディアから寄せられたコメントである。"Captivating." (心を魅了する！)"...a great young talent." (素晴らしい若い才能)"...always prepared with adventurous and challenging repertoire material..." (冒険心に富み、挑戦するようなレパートリーをいつも用意している)"...a dedicated worker eager to learn all there is to know about singing and jazz music...highly motivated and talented." (歌うことやジャズという音楽を知るための全てを熱心に学ぶ、専心的な職人。大いなる刺激と才能の持ち主)"...I hear a lot of beautiful soul in (her)voice and music." (素晴らしい魂が彼女の声と音楽からたくさん聴こえてくる)

そして、ヴィーナス・レコードの原プロデューサーも、もちろん、その才能に魅了された1人だ。2~3曲入りのデモ・テープを耳にし、直ぐにレコーディングを決めた、と語っている。そして、2003年の7月19日&20日、このたった2日間で15曲の録音を済ませてしまったのだから、その仕事の早さには驚かされる。いや、つまり、それもこれも全てはシモーネの確かな歌唱力あってこそ。1日7~8曲ヴォーカル録りを終えられることこそ、その実力の裏付けなのである。

本作では、いわゆるジャズのスタンダード以外にもスティングやザ・ビートルズのナンバーが歌われているが、それも22歳の若い女性にとってはごくごく自然な流れだったのではないだろうか？　つまり、このアルバムは“いわゆるジャズ・ヴォーカル”というカテゴライズだけでは治まらない、より幅広い可能性を持っているということだ。そして、それは原プロデューサーの狙いでもある。

『もっと幅の広いリスナーが楽しめる、リラックスできるアルバムですよ。ラジオの乗りも非常に好い感じの』　確かに1曲目を聴いた時に、まずは“安心感”が伝わってきたし、それは、アメリカのシンガー特有の伝統的な温もりに加えて、ヨーロッパならではの知的な雰囲気もしっかりと備えている。そして、クレモンティエヌ（フランス）やローラ・フィジー（オランダ）といった日本で特に人気の高いヨーロッパのシンガーとも近い空気が感じられたのだが、それは、シモー

ネがその2人と同じく、ジャズという枠にカテゴライズされることなく幅広い年代から大きな支持を得る可能性を秘めている、という意味でもある。<ムーンライト・セレナーデ>でのなんとも言えないキュートさ、<フラジャイル>での“イイ女”的な雰囲気、そして<L-O-V-E>での息遣いが伝わるセクシーな歌謡…お馴染みの旋律がフレッシュなヴォイセズによって耳に届けられる喜び。これは堪らない。特に<二人でお茶を>でのナチュラルな温もりは、ニック・デカロのヴァージョン（「イタリアン・グラフィティ」（1974年））と同様の親密さを抱かせるものだし、また、ザ・ビートルズの<フォー・ノー・ワン>は、彼らのポップ・ワールドをジャジーに表現する上でのお手本とも呼びたい、秀逸な仕上がりになっていると思う。ジャズ系のアーティストだと<イエステディ>や<ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード>といった有名バラードに走りがちだが、この<フォー・ノー・ワン>を取り上げたこと自体、非常にセンスが好いと思うし、これは単にザ・ビートルズの曲も演っています、といった宣伝文句を越えた意義のあるカヴァーだと思う。

といった感じで、主人公シモーネの歌唱に賛辞を送り続けてしまったが、シンガーを存分に尊重する3人のバックिंगも決して見過ごすことは出来ない。ロマンティック・ジャズ・トリオという名称にもニッコリさせられるが、まさにそんな優雅な世界を演出する実力派だ。ドラムスのフィリップ・コップマイヤーは先程も述べたとおり、シモーネの弟で、この原稿を書いている時点ではまだティーンエイジャーという、将来が楽しみなプレイヤー。ドイツ、イタリア、アメリカのドラム・ワークショップに顔を出し、ジョー・ボーカロ（故ジェフ・ボーカロ（ex.TOTO）の父親）、スティーヴ・スミス（ex.ジャーニー、ヴァイタル・インフォメーション）他、いろいろなドラマーの元で学び、これまでに、ベルギーの名ギタリスト：フィリップ・カテリーン、シャーデーとの共演でも注目されたロンドンのサクソ奏者：ピーター・キング他、いろいろなジャズメンと共演している。

ベースのハンス・グラヴィシュニックはシモーネと同じオーストリアの出身の現在32歳。1992年からニュー・ヨークに移り、1995年からボビー・ワトソン、レイチェルZ、ヴィクター・ルイス、メイナード・ファーガソンらと共演。その名前を広め、さらに、バキート・デリヴェラ、デイヴ・サミュエルズ、リック・マーギツァ、ピリー・ハーバー、フィル・ウッズ他、多数のビッグ・ネームとプレイしている。

ピアノのジョン・ディ・マルティーノはグループの最年長で現在44歳。彼はフィラデルフィアの生まれで、これまでにケニー・バレル、ジェイムス・ムーディー、エディ・ゴメス、ジョン・ヘンドリックス、ダイアン・シューア、ピリー・エクスタイン、レイ・バレット、グラディ・テイト、フレディ・コール他、多数の有名どころと共演している。そしてそのラインナップを見ても解るとおり、シンガーのバックィングはまさに得意とするところのようだ。また、リーダー作も「Birds Of The Heart」(Panda Moon)、「The Troubadours」(CAP)と、これまでに2枚発表している。

22歳のヨーロッパ人・レイディがニュー・ヨーク経由でトーキョーから発信する1stアルバム「ムーンライト・セレナーデ」。このアルバムが1人でも多くのリスナーに幸せ気分を届けることを願う限り。そしてシモーネの声には人々を優雅にする力が込められている。それがなによりの魅力ではないだろうか。

TOSHIKI NAKADA : 中田利樹 (COOL SOUND Inc.)

また1人、魅力的な女性シンガーが日本でデビューを飾る。シモーネ（本名はSimone Kopmajer）、ブラジルの女性シンガーで同名の人気シンガーが存在するが、こちらのシモーネはオーストリア出身の22歳（1981年9月の生まれ）という、フレッシュなアーティストだ。ブラジルのシモーネとは基本的な音楽性が異なるし、何より声質が全く違う。あちらはいわゆるアルト・ヴォイスで魅了するタイプだが、こちらはより高い音域で自己表現を計るタイプ。ということで、両者を較べた場合、麗しの女性、というのが唯一の共通項、という感じだが、如何なるものであろうか？

それはともかく、本作「ムーンライト・セレナーデ」。これが、シモーネの処女作となるわけだが、ヴィーナス・レコードからの登場、というのが、美味しいポイントだ。今回も、知的で洗練された声、そして、我々男性を魅了する艶やかなルックス、この2つをしっかりと備えていたので思わずニンマリさせられた。“今回も”と書いたのは、ここからはすでに、アデラ・ダルト、シャリース他、いろいろな実力派女性がお披露目され、その何れもが、今言った2つの要素を携えての登場だったからである。おそらくこれは、ヴィーナス・レコードの原プロデューサーの嗜好かと思うが、ヴィーナスの看板を背負ってのリリースなのだからレヴェル的に見て、軽く水準以上の逸材であることは間違いない。特に、歌声だけを聴いているとそれなりのキャリアを持つシンガーかと思ってしまうが、実際は、冒頭で述べたとおりまだ22歳という若さ。将来性という点でも非常に楽しみなアーティストである。

そんな主人公の経歴をご紹介するのがライナーノーツの定石だとは思うが、いかんせん、まだチャキチャキのニューカマー。いろいろと書き綴るほどのキャリアはないのだが、それでも、伝えるべきことは幾つかあるので、その辺りを書いてみよう。オーストリアのシュラッドミングという街で生まれた彼女は、両親が音楽の先生という、恵まれた環境に育っている。実は、本作でドラムスを叩いているフィリップ・カップマイヤーは、シモーネの弟なのだが、彼は今年（2004年）20歳を迎えるさらなるヤング・ウェポンだ。彼のドラミングもまた実際の歳より数段年輪を感じさせるものであり、レコーディング当時18歳だったことが信じられない奥深さを提示している。そして、それもこれも、カップマイヤー家の音楽的な筋力が可能にしたもの、と言って間違いないだろう。父親はザルツブルグに近い街にある音楽学校で校長を務めており、母親もそこで教師を務めている。さらに父親は、ビッグ・バンドも演っていて、シモーネは12歳からそこで歌っている、ということだ。そのビッグ・バンドが実際にどんなレパートリーをこなしていたかはもちろん解らないが、ジャズの下地を植え付け、さらに、ポピュラー音楽への入り口となったのがそのバンドだったことは容易に想像できる。

その後もシモーネは、歌うことや音楽そのものに対する興味を強く抱き続け、特に、アメリカ音楽界のレジェンダリーなアーティスト達から大きな影響を受けるようになる。メル・トーマ、エラフィッツ・ジェラルド、フランク・シナトラ、ルイ・アームストロング…歴史にその名を残した大御所達がまだ10代だったオーストリアの女性の未来に夢と希望を与え、それを具現化するべくシモーネは大学に入っても音楽を専攻し、そこでワークショップでマーク・マーフィー、シーラ・ジョーダン、ニュー・ヨーク・ヴォイセズ他のアーティストから、実際に手ほどきを受けるのだった。

そして、2000年、彼女はオーストリアからアメリカに渡り、そののクラブで歌う仕事をスタートさせる。まさに、アメリカン・ドリームを実現させるべく一大決心と言って好いだろうが、自身のスタンス、